

〈歌ことば〉を生きる——『大和物語』二十三段試論——

亀田夕佳

一、問題の所在

『大和物語』二十三段は元良親王の訪れが途絶えた女君、後蔭中将の女の物語を収めている。従来、実在の人物が登場するため史実との関わりが指摘され、専ら「あはれ」の情調が読み取られてきた章段であるが、歌物語の骨子である「和歌」の在り方や、その和歌を成り立たせている「歌ことば」の機能については、丁寧な議論がなされたいはいえず、考察すべき課題が残されている。本論では、和歌の表現を基点にしたところから本章段を解釈し、この物語における表現的達成がどのようなものであるのかを考えたい。次に二十三段を示す。

陽成院の二のみこ、後蔭の中將のむすめに、としごろすみたまひけるを、女五のみこ得たてまつりてのち、さらにとひたまはざりければ、今と思ひたえて、いとあはれにてゐたまひけるに、いとひさしくありて、思ひかけぬほどにおはしましたりければ、え物もきこえて、逃げて戸のうちにいりにけり。かへりたまひて、みこ、あしたに、「などか年ごろのことも申さむとてまうできたりしに、かくれたまひにし」とありければ、ことばはなくて、かくなん、せかなくに絶えと絶えにしやまみづの

誰しのべとか声を聞かせむ

(二六九—二七〇頁)^①

「陽成院の二のみこ」である元平親王が「後蔭中将のむすめ」と長年親密に交際をしていたが、女五の宮とつきあうようになってからは、全く訪れがなくなってしまう。そうした状況で、後蔭中将のむすめが二人の仲は終わりなのだと思しみに暮れていたある日、久方ぶりに親王が訪ねてきたのである。後蔭中将のむすめは、思いがけない訪問に物も言わず塗籠のうちに入ってしまった。親王は仕方なく帰ることになるが、なぜ姿を見せてくれないのかと言葉をかけるのだった。

「せかなくに」の和歌は、むすめに会えないまま帰った親王が「なぜ言い訳もさせてくれず隠れてしまったのか」と言ってきたのに対して、後蔭中将のむすめが返したものである。絶えてしまった二人の間柄を引き合いにし、声を聞かせることはないという、親王への拒否の姿勢が示されている和歌であり、「嘆きを通り越して絶望する」意だとの指摘もある^②。

二十三段の和歌について、三句以下「やまみづの誰しのべとか声を聞かせむ」が後蔭中将のむすめの心情をいうものであると解釈する点については、諸注釈において概ね共通している。意見の対立が見られるのは、上句を承けたところでの「せかなくに絶えと絶えにしやまみづ」について、主体を後蔭中将のむすめとするか、元平親王とするかである。二つの解釈の違いは古注釈においても次のように示されている。

(A)北村季吟『大和物語抄』³⁾

此うた、まへの言葉に、「おはすまじきなめりと思ひたえて」とある詞をうけてきくべし。心ばせかれたる水は、末ほそけれど、いせきよりあまるにつけても、おのづから声する事もあるべし。只又、水上より、をのれと、たえに絶えはてし水は、こゑすべきやうもあらぬを、序によめり。たれしのべとかといふに、ふかく思ひたえたる心みえ侍り。とてもしのばるべきにあらずと、みづから思ひ絶え侍るゆへ、ものをも申さず、にげかくれ侍りしぞとなり。

(B)木崎雅興『大和物語虚静抄』⁴⁾

たえとたえにしとは、絶えしことを、つよくいはんとて、詞をかさねたる也。ただなきになきてなどいふ類也。歌心は、此方より来り給ふなど、せきとめしにもあらず、みこの御心より中絶はて給ひぬれば、かく不意におはしたれど、とても忍ばるべき我身にもあらねば、物をも申さでにげ入しとの心也。

(A)北村季吟『大和物語抄』は、「今はと思ひたえて」とある地の文の表現をふまえて理解すべきとする立場であり、「絶えと絶えにし」を「後蔭中将のむすめ」の行いだと解する。同様の主張は柿本奨氏においても「地の文の「思ひ絶えて」と響きあう。〈中略〉側近者が皇子との交際を制止したのではないのに縁が切れた(皇子の通いの絶えた)私が、の意で、「山水」は娘自身を譬える」と指摘されている。

(B)木崎雅興『大和物語虚静抄』は「絶えと絶えにし」を元平親王が「さらにとひたまはざりければ」となったことを指すとし「みこの御心より中絶えはてたまひぬれば」としている。このように、上の句からの続きの「やまみづ」を親王とし、下の句をふまえたところでの

「やまみづ」を後蔭中将のむすめとする立場は、近代以降の注釈書にもしばしば見られる。例えば『大和物語全訳注』では、次のように述べられている。

上句は流れの絶えた山水に訪れの絶えた皇子をたとえ、今さら訪ねてこられても(山水が音を立てても)どうしたらよいかわからない、の意を含む。下句は後蔭女が「戸の内に入っ」て会うのを避ける理由を述べたもの。⁵⁾

「絶えと絶えにし」について、地の文の「今はと思ひ絶えて」との関わりに立脚すれば主体は後蔭中将のむすめとなるが、親王の行動に即して訪れなくなったことを指すとすれば元平親王となるのである。だが、むすめが「思ひ絶え」たのは、親王の訪れが「絶え」たためであるため、どちらかを主体として決めるといよりは、『日本古典全書』のように「二人の仲」が「絶え」たとするのが適当だと考えられよう。⁶⁾

季吟の指摘で重要なのは、和歌の解釈を「地の文の表現との関わり」において行うべき点とした点である。従来あまり注意が払われていない印象があるが、物語に和歌が置かれる時には、地の文の表現がいかに和歌が詠出される下支えとして機能しているかを忘れてはならない。冒頭にも触れたが、従来の『大和物語』研究では、歌物語であるにも関わらず「和歌」や「歌ことば」の表現性に立脚したところからの読み取りが後廻しにされている傾向がある。本論では、歌ことばを問うことによって物語の解釈を試みたい。

具体的には、歌ことば「やまみづ」を取り上げる。後蔭中将のむすめは思いを訴えるときに、なぜ「やまみづ」の表現を選んだのであるか。「水の流れ」に喩えたいのであれば、「滝川／山川」などの表現

でもよかったはずである。「やまみづ」でなければならぬ理由はどこにあるのだろうか。「やまみづ」が何を表しており、それがこの章段にとってどのような働きをするものであるのか、表現に即して考えたい。

二、「やまみづ」の語義——「堰く／絶ゆ」との関わりから——

「やまみづ」は一般的に「山中を流れる水。また、山と緑のある美しい風景」とされておき、歌ことば「やまみづ」には漢語「山水」と関わりが認められる場合があるとされている。和歌における「やまみづ」の用例は、おおよそ六十五首認められた。

『大和物語』二十三段の「やまみづ」は「せかなくに絶えと絶えにし」とされるように、「堰きとめてもないのに絶えてしまった」ものとして詠まれている。以下示すように、「やまみづ」は、しばしば「堰く」こととの関わりにおいて詠まれる。しかし、当該歌のように「せかなくに」とされるのは管見では国歌大観中で孤例であった。

女につかはしける

よみ人しらず

- ① ゆく方もなくせかれたる山水のいはまほしくもおもほゆるかな
(後撰集、卷第十、恋二、五九〇)

女のもとにつかはしける

よしの朝臣

葦引の山した水のこがくれてたぎつ心をせきそかねつる
返し

- ② こがくれてたぎつ山水いづれかはめにしも見ゆる音にこそ聞け
(同、卷第十一、恋四、八六〇～八六一)

大井のみかどの大納言の上の御もとよりたてまつりし

- ③ 山みづのいはまほしくはありながら

なほせかれつつもりにけるかな

かへし

- ④ 思ひつつせかれければやまみづの

いはかき沼にしたよどみつる

(伊勢大輔集、九五～九六)

右の①は「やまみづ」の初例とされる歌であり、思うようにいかない恋心が堰き止められた山の水に喩えられ、堰きとめられているが故に「岩間／言はま」が求められるとしたものである。山から流れてくる水は、表面には見えないため、しばしば「やましたみづ／山下水」と詠まれることがある。

次の②「やまみづ」は贈歌の「山した水」が「激しい心を堰きとめられない」と詠みかけたのに対し、その思いは山中の木に隠れてしまっているため、音はするけれど、事の真偽がはっきりと目には見えないと切り返した歌である。贈歌は詞書から「つかはし」た歌であることが分かり、②の「音にこそ聞け」については「今のお歌のように口でおっしゃるのはお聞きいたしますけれど」と、歌を口にするということをとされている。

「やまみづ」が山を流れる水であるため、①では「岩間／言はま」を導く働きが見られたが、同様の詠みぶりは③、④の贈答歌においても見ることが出来る。③では思いを伝えたいが、何らかの障壁に阻まれたものの「漏りにけるかな」と、隙間からこぼれるように思いが漏れ伝わったとしている。④の返歌においても「やまみづ」は「いはがき沼」を導き「いはがき／言はがき」とされるように、「言う」こととの強い関わりにおいて詠まれている。

さて、「やまみづ」について、二十三段の和歌の上句に見られるよ

うに「堰く」と関わって詠まれる用例を確認してきた。「やまみづ」は「山の中を流れる水」であるため、思いや関係を表だって主張する表現ではないが、堰きとめられるような場合には、岩間を求めて表面化するようなものとして詠まれていた。「やまみづ」は恒常的に流れるものであり、堰きとめられでもしようものなら却って溢れ出るような性質があるのだといえよう。従って「堰かなくに／絶ゆ」と続ける当該歌は、「やまみづ」の在り方からすると、特異な詠みぶりであるといえる。

「やまみづ」は表面化しない水の流れをいうため、②の贈答歌に見られるように、山の下側を流れる「やましたみづ」と同義と捉えられることもあった。¹²では、当該歌に「絶えと絶えにし」と繰り返されている「絶ゆ」は「やましたみづ」や「やまみづ」とどのように関わるのだろうか。いくつか示す。

文ちらしけると聞きて、ありし文どもとりあつめてお
こせずは、返事書かじと、言葉のみにていひやりけれ
ば、みなおこすとて、いみじくゑんじたりければ、む
月十日ばかりのことなりけり

⑤ とちたりし上のうすらひとけながらさは絶えねとや山のした水
(紫式部集、三三二)

ふゆ、おとせぬひとに

⑥ こほりとち山下みづもかきたえていかにとだにも音無しの滝
久しくおとづれ侍らぬ女のもとに師走の廿日あまりの
ほどにつかはしける
(伊勢大輔集、五五)

⑦ とどこほる春よりさきのやまみづを

絶えはてぬとや人はしるらん

かく申しつかはしたれども物に籠りたるよしを申して
返事もなかりしが、年かへりて正月十日比にかれより
つかはしたりける
小侍

とどこほる音かとききし山河の絶えはてぬとは春ぞしらるる

(頼政集、四二二〜四二二)

⑤の『紫式部集』は、夫宣孝とのやりとりである。自分の書いた文を他人に見せ回っていると聞いた式部は、すべての文殻を返却するよう求め、その求めに応じて宣孝が恨み言とともに返却してきた。その宣孝に向けた和歌である。宣孝は式部の求めに応じて文を返したのだが、それを逆手にとって「さは絶えねとや」と「手紙を返すとはもう間柄が絶えてもいいのですね」とさらなる攻撃をしている歌だと理解できる。¹³

春になり山上の水が溶けたため、山下水の勢いは増すはずであるにも関わらず、「絶えてしまえというのですか」という言い方からは、水に閉ざされでもない限り、山下水は絶えないものだという認識を伺うことができよう。⑥は山下水が凍ってしまったため、水の音が聞こえないさまに、音信のない相手を喩えた言い方である。

連絡のない相手との関係をいう際に、「やまみづ」が「絶ゆ」状態にあるとするのは⑦においても指摘できるが、その場合は「とどこほる春」というように、⑥と同様に、春の訪れが遠く水に閉ざされていなければならぬのではないだろうか。つまり「やまみづ」は水に閉ざされでもない限り「絶え」ることはないのだと考えられるのである。

「堰かなくに絶えと絶えにし／やまみづ」の組み合わせは、「堰き

とめてもいない／氷に閉じられているわけでもない」状態で「絶えと絶え」てしまったという、本来ならばありえないような状況をいう表現だといえよう。この言い回しからは、後蔭中将のむすめの「あるべきではない、あってはならない」ことが我が身に起こってしまったのだという、「衝撃」ともいえるべき強い感情を読みとることができように思う。

三、「やまみづ」の語義(2)——「澄む／住む」との関わりから

ここまで、『大和物語』二十三段を「歌ことば」や「和歌」を基点に理解するにあたり、「やまみづ」について「堰／絶ゆ」とどのように関わるのかを考察してきた。続けても「やまみづ」がどのようなものであるかを論じてゆく。

先に「やまみづ」が冬の氷に閉ざされていなければ「絶ゆ」ことのないものであると述べた。春になり氷が解けると「やまみづ」となっているため、次に示すように「やまみづ」は「冷たいもの」として捉えられている。

⑧ やまみづを手にむすびてもこころみむ

ぬるくは石のなかも頼まじ(伊勢集、四三八)

又、春たつ

⑨ やまみづのこほりとけつつ春くれれば

ぬるき風にもはやきなりけり(重之集、三九)

右の⑧『伊勢集』は求愛してきた男性に対する歌である。「やまみづ」の温度に相手の心を確かめるとし、「ぬる」かったならば不誠実とみなすという。『伊勢集全注釈』では「清冽であるのが「山水」で

あり、「ぬるく」あるのは不適當とする」とされている。⑨『重之集』では、山の氷が溶けた水を「やまみづ」とし、春の「ぬるい風」と対照的に詠みこんでいる。

はるかな山の上から木々の間を通して流れ落ちてくる「やまみづ」は、平地を流れている川などの水とは異なる特別なものとされたのだろうか。「やまみづ」の清く澄んだ性質は、漢語「山水(さんすい)」の世界に通じる要素だともいえる。なお「山水」の初出である『懷風藻』においては『論語』「山水仁智」の影響を受け「神仙に重ねられた表現である」との指摘がある。

漢語「山水」と和語「やまみづ」がどのように関連するものであるのかについては、ここで取り上げる用意はないため用例の指摘に留まるが、漢語「山水」について「世俗的人間社会と対比される自然界一般をいうことがある」とされる側面は、和語の「やまみづ」においても見出すことができる。

曉方なりにければ、法華三昧おこなふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくると尊く、滝の音に響きあひたり。

吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな

⑩ さしぐみに袖ぬらしけるやまみづに

すめる心は騒ぎやはする

耳馴ればべりにけりや」と聞こえたまふ。(若紫①二一九頁)

かの住処いかにしてと、あはれがらせたまへば、見にとて人々おはして、かへりて

⑪ すむ人の心くまれしやまみづを思ひいづるも袖はぬれけり

返し、このは埋もれて水の見えねば、あるままのことを

⑫ ちりしける木の葉のうづむやまみづを心くむらむ人やらはむ

(四条宮下野集、二〇三〜二〇四)

⑬ ときどき心やましくは、なかなかやまみづも濁りぬべくとのたまへば
(東屋⑥五三頁)

『源氏物語』若紫巻では光源氏に対する僧都の返歌に「やまみづ」が用いられている。「やまみづ」は光源氏が流した涙をいうと同時に、僧都が住んで行いをしている場所が「住み／澄み」を伴って詠まれている。「やまみづ」が「山の水」であるがゆえに「澄む」と分かちがたい連想関係にあったといえるだろう。⑪、⑫の『四条宮下野集』では「山里」に移り住んだ作者のもとに人々から歌が届けられるというものである。人里離れた場所に「住む」はおのずと「澄む」ことになり、「やまみづ」が導かれているのである。

また⑬は、和歌ではないが、「やまみづ」が本来「澄」んだものであるという理解を裏返しに、「心やまし」い状態だと「やまみづ」が「濁りぬべく」としており、「歌ことば」の発想を踏まえたところに成り立った表現だといえる。

「やまみづ」がどのような特性を持つ表現であるかを考察してきた。見てきたように、「やまみづ」は世俗の人々が日々を暮らす場所から隔絶した「山」から流れてくる「水」であるため、「清澄」なものだと捉えられていることがわかった。つまり「やまみづ」は「澄む／住む」とつながりが強い表現なのだといえるのである。

そして、このことは『大和物語』二十三段の内容を「地の文」と「和歌」との相互の表現の響きあいにおいて理解する場合、重要であると考えられる。先に、北村季吟が二十三段の和歌を解釈するにあたって、地の文に「おはすまじきなめりと思ひたえて」と示されている表現を

ふまえるべきだとしたことを述べた。繰り返しになるが、季吟の指摘は歌物語を和歌と地の文から成る文芸作品として総合的に考える視点を提供しているのである。

即ち、歌ことば「やまみづ」が「澄む／住む」を裏側に抱え込んでいることは、おのずと二十三段冒頭「陽成院の二のみこ、後蔭の中将のむすめに、としごろすみたまひけるを」の「すみたまひける」との関わりを導くのではないだろうか。後蔭中将のむすめが選んだ「やまみづ」の表現は、元平親王とむすめが共に「住」んでいた二人の時間をいやおうなしに重ねる表現効果があると考えられるのである。

ここまで、歌ことば「やまみづ」を取り上げ、その表現性に立脚したところで和歌の解釈を試み、二点について述べた。まず、「せかなくに絶えと絶えにし」は「やまみづ」の詠まれ方としては通常にはない特異な表現を用いていることがわかり、「絶え」てしまった状態について「本来起ころはずがなかった」出来事だと捉えているさまを読みとった。次に「やまみづ」は「すむ」との強い結びつきがあることを改めて指摘し、冒頭の「年ごろすみたまひける」状態を連想させる表現であることを述べた。一般的な歌ことばの世界に少し手を加えたところに面白さを見出しているのかもしれない。

一首の意としては「澄んだやまみづのように一緒に「住んだ」間柄でしたのに、ありえないことですが、堰きとめもしないのに絶えてしまいました。やまみづは音がするはずですが、こうなっては声をお聞かせするわけにはまいりません」となるうか。

このように解釈してみると、後蔭中将のむすめの心情はいかにも哀切に綴られている歌だといえるが、問題は、『大和物語』の総体としてどのような表現世界を成し得ているかという点である。地の文と和歌はどのように関わるのか、「まとめ」として考えを述べておく。

四、まとめ

『大和物語』二十三段の和歌は、『続後撰集』には次のように収められている。当然ではあるが同じ和歌であっても事情の語り方には大きな違いが認められる。便宜上、二十三段と共に示す。

彈正尹元平親王久しく通ひ絶えてのち立ちよりて侍りけるに、逢ひ侍らざりければ、帰りてうらみつかはしたりける返りごと
とに
藤原後蔭女

せかなくにたえとたえにしやまみづの誰しのべとか声をきかせむ
(続後撰和歌集、恋歌五、九八六)

陽成院の二のみこ、後蔭の中將のむすめに、としごろすみたまひけるを、女五のみこ得たてまつりてのち、さらにとひたまはざりければ、今とは思ひたえて、いとあはれにてゐたまひけるに、いとひさしくありて、思ひかけぬほどにおはしましたりければ、え物もきこえて、逃げて戸のうちにいりにけり。かへりたまひて、みこ、あしたに、「などか年ごろのことも申さむとてまうできたりしに、かくれたまひにし」とありければ、ことばはなくて、かくなん、

せかなくに絶えと絶えにしやまみづの
誰しのべとか声を聞かせむ

あえて並べてみたが、『続後撰和歌集』では「逢ひ侍らざりければ」とだけある部分が、『大和物語』では「すみたまひける／思ひたえて」と和歌と共鳴する表現によって状況が語られ、「え物も聞こえて／逃げて戸のうちにいりにけり／かくれたまひにし／ことばはなくて」と、くどいほどに親王と逢わない様子を語っていることがわかる。

この過密なレトリックは、悲哀を通り越して戯画化された笑いの地

平を拓いているとも思われるが、重要なのは、一連の行動が、和歌の下の句「誰しのべとか声を聞かせむ」を裏付ける点である。「声を聞かせむ」の「声」はいうまでもなく「やまみづ」の「声」である。

即ち、親王に挨拶もせず逃げて隠れる後蔭中將のむすめは、「せかなくに絶えと絶えにしやまみづ／やまみづの誰しのべとか声を聞かせむ」という「歌ことば」の世界を自らの行動で具象化させる女君として描かれているといえるのではないだろうか。「歌ことば」に熟達した段階での「遊び心の発露」とでもいうべき所に、この物語の達成を指摘しておきたい。タイトルに「〈歌ことば〉を生きる」とした所以である。

(注)

- 1 引用は、『大和物語』、『源氏物語』は新編日本古典文学全集、和歌は新編国歌大観により、頁数および歌番号等を示した。私に表現を改めた箇所がある。
- 2 柿本奨『大和物語の注釈と研究』、武蔵野書院、一九八一年。
- 3 北村季吟『大和物語抄』(『大和物語古注大成』、日本図書、一九七九年)による。
- 4 木崎雅興『大和物語虚静抄』(注3に同じ)。
- 5 注2に同じ。
- 6 雨海博洋・岡田美樹『大和物語全訳注』(『講談社学術文庫』、二〇〇六年)。
- 7 南波浩校注『日本古典全書 大和物語』(朝日新聞社、一九六一年)では「全く絶えてしまった仲で」とし、「二人の間柄」と解している。従いたい。
- 8 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』、角川書店、一九九九年。
- 9 用例の検索には「新編国歌大観CD-ROM」を用いた。なお「やまみづ」は「やまみづ／山みづ／やま水／山水」とした。
- 10 古今集一〇〇一番歌(巻第十九、雑体、詠み人しらす)は「やましたみづ」

の初出とされるが、「あしひきの 山下水の 木隠れて たぎつ心を
誰にかも 相語らはむ」とあり、「やまみづ」と同様に「たぎつ心」を
いうものとなっている。

11 片桐洋一校注『新日本古典文学大系 後撰和歌集』（岩波書店、一九九〇年）。

12 『日本国語大辞典』では「やまみづ」として「②山から流れ出る水。山の水。山下みづ」とし、後撰和歌集五九〇番歌を初出とする。

13 『紫式部集』の解釈は、田中新一著『紫式部集新釈』（新注和歌文学叢書2、青蘭舎、二〇〇八年）参照。

14 秋山虔・小町谷照彦・倉田実『伊勢集全注釈』（角川書店、二〇一六年）。

15 岩城準太郎「日本文学と山水」（『国文学』第五卷第十号、一九四〇年十月）、波戸岡旭『懐風藻』吉野詩の山水観——「智水入山」の典故を中心に——（『国学院雑誌』第八十五卷第十号、一九八四年十月）参照。

16 注12に同じ。